

学部・研究科名 応用生物化学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・演習・実験科目のほか、分野横断的な選択科目（生体機能化学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。	大学院生への教育・研究支援は、所属研究室におけるセミナー、個別指導などを通じて手厚く行っている。	学生の研究活動、講義科目の成績、発表会などから総合的に評価している。	所属研究室における定期的なセミナー、専攻全体での中間発表会、および最終発表会などを通じ、継続的に学習成果を把握している。	評価アンケートの結果や各研究室の現状、教員間で共有し、会議の場で議論するとともに、継続的な改善に努めている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、農芸化学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康に関わる課題解決に取り組むことができる学生を求めている。大学院進学後に必要となる学力を評価するため、英語と農芸化学基礎（生物化学及び有機化学、無機化学）を試験科目としている。これらの筆記試験に加え、大学院指導教授による口頭試問により評価している。可否判定については、会議において、厳正・公平な審査を行っている。2 期入試受験者に対しては、口頭試問において、卒論研究に関するプレゼンテーションを行うことで適正を測っている。	試験後の選考会議において、専攻の教員間で十分に議論し、学生選抜の適切性を担保できるよう努めている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各研究室に必要な人数の教員が在籍し、各教員の専門分野も専攻の専門性に沿っている。 採用時の面接で教育や研究に関する適正を測っている。	学内ルールに則り、教員の新規採用と昇任手続きを実施している。	FD セミナーなどに教員が積極的に参加している。	学科全教員もしくは大学院指導教授をメンバーとする会議体により、情報共有と意見聴取を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	醸造学専攻のカリキュラムポリシーに基づいて、醸造学にかかわる高度な研究者、教育者、専門家としての総合力を確立するために、特論科目、基礎科目、研究科目を配置している。	M2を対象として、6月に対面でのポスター発表会（中間発表会）を実施し、研究の成果と今度の方針について議論を深めた。また、応用微生物学特講ではZoomを用いて文献紹介も実施しており、対面のみならずオンラインでの発表にも対応できるようスキル向上に努めた。	シラバスに明示されている各科目の評価基準に基づいて成績を評価し、単位を認定している。また、学位審査及び修了認定は最終プレゼンテーションと質疑の内容を踏まえて、専攻内全指導（准）教授による会議にて客観的かつ厳格に行っている	学生の学習成果は醸造学特別実習や特別研究科目を通じて各研究室において適切に把握し、評価している。また修士2年の中間発表会において他研究室の授業担当者からも評価を受けている。	必要に応じて専攻内教員の間で意見を交換し、教育課程の内容と方法の適切性を評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・オムニバス形式で実施する醸造学概論については、教員独自の高度な内容を含むようにしている。	【長所】 ・教員および院生同士でのディスカッションを通じて、総合力を養っている。	【長所】 ・最終プレゼンテーションに対しては、学位授与に資するかの判断を念頭に活発な質疑が行われている。	【長所】 ・中間発表会においては、他研究室の教員とディスカッションしており適切に学習成果を把握及び評価できている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・修士1年生の前期に醸造学概論、後期に応用微生物学特講と、醸造学とその基本となる微生物学について重点的に科目を開設している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	推薦入試を 5 月 31 日に適切公正に実施し、7 名が合格した。大学院 1 期入試および 2 期入試については、希望者を対象に事前に説明会を実施し、入試制度を説明すると共に、専攻の特色やアドミッションポリシーについて説明をした。アドミッションポリシーに即した基礎学力を評価するため生物化学（微生物に関すること）と英語を入試科目とし、公正に選抜を実施した。	博士前期課程では定員（20 名）に対し、本年度合格人数は、40 名（推薦：7 名、1 期：25 名、2 期 8 名）とした。醸造学専攻では、英語と化学が基礎となるため試験科目は「英語」及び「生物化学（微生物に関すること）」として今年度実施したが、受験生がより試験科目の内容を理解できるよう生物化学については次年度は「生物化学（微生物学・分子生物学の内容を含む）」と変更することとした。よりよい試験科目の在り方について検討を継続していく。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・推薦入試では、高い GPA (3.00)を基準とすることで、大学院進学を目指す学部生に対して GPA に対するインセンティブを明確にできた。 ・1 期入試および 2 期入試では、事前に説明会を実施することで、アドミッションポリシーを理解した受験生を集めることができた。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・推薦入試では、出願資格の要件として GPA3.00 以上と高い基準を設定している。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・今年度は定員に対して出願者数が多く合格者数も多かった。次年度の出願傾向を踏まえ、定員数が適正かについて検討が必要と思われる。
	【課題】 ・推薦入試については、学部生の学習意欲を高める効果をより生かすために、低学年次学生への積極的かつ適切な周知を行うことが望ましい。新学期のガイダンスなどでも紹介する。	【課題】 ・研究意欲のある学生に、他大学院よりも本専攻を選択してもらえるような指導を模索する。また、英語の科目では TOEIC の点数を対象とした方がよいかなどよりよい試験科目の在り方について検討を継続していく。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・東京農業大学の求める教員像、東京農業大学大学院農学研究科教員組織の編制方針に基づき、醸造学専攻教員組織の編制方針を策定している。	・醸造学専攻の主要科目である醸造微生物学、微生物工学、酒類生産科学、発酵食品科学、調味食品科学、醸造環境科学の各特論に指導教員を配置している。指導(准)教授は 11 名であり院生数が増加するものの十分に対応できる。	醸造学専攻の教育・研究の将来計画に基づいて教員の募集、採用、昇格等を適切に行っている。 将来計画に基づき、新規採用教員が就任予定である。	教員の資質向上のための基盤づくりのための話し合いを行い、将来的な実施に取り組んでいる。	・研究室内の指導体制や教員組織体制について専攻内で議論している。学生からの聞き取り調査も行い、問題があれば対処できる体制をとっている。 ・大学院関連の会議報告や連絡を専攻会議だけでなく学科会議でも行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2020 年度に開設した博士前期課程および博士後期課程のカリキュラムは、文部科学省に届け出済みのものであり、カリキュラムポリシーに則って、食の安全並びに健康機能に関する問題解決力を身につけることを目論んだ編成になっている。なお博士前期課程の現カリキュラムは、2018 年度からの旧カリキュラムに一部修正を加えたものである。	英語論文購読という科目を設け、学生自ら英語論文を読み、理解し、教員・学生・院生同士の前での発表が組み込まれている。また、食品関連分野の専門家を招き、最先端の情報、食品関連に興味を持つ情報を積極的に提供している。学内研究発表会や修士論文発表会を通じて、発表を行うための準備方法、発表内容の構成力、分かりやすく伝えるプレゼンテーション力の向上を促すことに繋がった。	単位制度および学位授与は、1 年次の春に新入生ガイダンスを行い、学生全員に周知している。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。また、成績評価、単位認定について質問がある場合には、指導教授、専攻主任、専攻主事から説明することとし、院生・指導教員間の対話を重視するよう促している。	各科目において、進行過程で出席状況を、レポート等の提出により理解度を把握することで、必要に応じた適切な補強指導を行っている。また、科目の終了時には、院生によるプレゼンテーション等によって学習成果の達成度を把握し、院生自らから発信することで、適切な評価に反映できるよう配慮している。	学期末に学生アンケートを実施し、その結果を各教員に周知し、次年度以降の授業内容の改善を促すようにしている。さらに、院生からの評価が低い項目については、各科目担当のみならず、専攻全体としても改善措置を講じている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 現在、研究をするうえで重要な研究倫理を必修としている。また、食品科学分野の研究に必要であり、最先端の情報を取得、理解できるような編成にしている。また、自分の出した成果を他人に分かりやすく発表できるためのプレゼンテーションスキルについても学べるカリキュラムになっている。	【長所】 2023 年 11 月に全学的に実施された学内研究発表会では、専門領域が異なる教員、院生はもちろん包括連携協定を締結している企業研究者にも研究内容を評価してもらうことにより、専攻内で行うトレーニング以上にプレゼンテーション力をつけることができる。	【長所】 入学時の新入生ガイダンスでの説明により、修了に必要とされている 30 単位のうち、1 年次で概ね 20 単位を履修し、概ね所属する全大学院生が単位を取得している。	【長所】 大学院では、受講者数が少ないため、レポート内容のプレゼンテーションやディスカッションなど、アクティブラーニングを導入している科目も多数ある。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・昨年度に引き続き、学生アンケートで 80%以上の満足度を得た。今年度も引き続き、指導教授 2 人体制をとることで、大学院生にとって満足のいく指導体制の維持を試みた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名		資料 2 大学院生の学会参加数と発表数の調査			

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	・なし	・なし
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・なし	・なし	・なし	・なし	・なし
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 裕司

学科名・専攻名 食品栄養学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	前期課程では、公表されている教育課程の編成・実施方針に記載された(1)、(2)、および(3)の各項目全ての授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力を涵養している。後期課程では、公表されている教育課程の編成・実施方針に記載された(1)の項目に記載された授業科目を開設し、学位授与方針に掲げた能力の向上に向けて適切に運用されている。	先端関連分野における外部機関所属研究者を招いた特別講義を開催し、研究の活性化を促進した。本年度も新型コロナウイルスの影響のため、例年より講義開催数は少数であった。	卒業・修了要件は、学生便覧等に明示している。論文審査は、修士は「公開審査会」及び合議制の「専攻内審査会」により審査を実施・承認した。博士学位論文審査は、必要な論文数を明示し、「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」開催による審査を実施した。審査は「学位論文審査基準、評価方法及び最終評価」に基づき、審査結果は、研究科委員会で報告し、承認を受けた。	博士前期課程の学生には、教育・研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、総合的に(1)学力、(2)論理的思考、(3)問題解決能力および(4)コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を評価した。博士後期課程の学生は、研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、要求される(1)体系的知識と分析力、(2)問題解決に向けた指導的能力および(3)国際的な発信力を評価した。	シラバス内容を、専攻内のシラバス検討委員会で確認、検証を行い、教育の改善・向上に役立てている。また、授業評価アンケートの結果と改善策を教員間で共有している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻3ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧、◆大学院シラバス	◆2023 年度食品栄養学専攻特別講義一覧（資料1）	大学院学生便覧 2023、◆学位論文審査基準、◆「公開審査会」並びに合議制の専攻内「審査報告会」の実施記録（資料2～3）、◆2023 修了判定根拠資料（資料4）	◆専攻内の「審査報告会」の実施記録（資料2～3）	◆2023F_授業評価アンケート集計結果 20231024（資料5）◆授業評価アンケートに対する改善計画書（資料6）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーとして、入学前の (1) 学習歴・学力水準、(2), (3) 入学希望者に求める水準等の判定方法、(4) 能力を設定し、ホームページ上で適切に公開した。受験生募集は、インターネットなどにおいて学生の受け入れ方針を明示して実施した。入学者選抜制度は、学内推薦入試と学内外の受験生の公平性を担保したⅠ期とⅡ期の一般入試を適切に設定した。入学者の選抜は、全ての入学試験において専攻内の研究指導教員より構成される入試選考委員による面接ならびにその後の専攻主任教授を委員長とする入試選考委員会の公正な審査を経て適切に行った。	学内推薦入試とⅠ期とⅡ期の一般入試の入試選考委員会において、学生受け入れの適切性について、選考委員間で十分に議論した。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻3ポリシー、◆大学院入試募集要項、HP等	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	応用生物科学研究科および食品栄養学専攻の教員組織の編成方針は、本学のホームページ上に公開している。	教育上主要と認められる食品栄養学特論ならびに人間栄養学特論の必修の特論科目に関しては、指導教授ならびに指導准教授が担当している。また、柱科目である選択科目の特論科目に関しては、すべての科目に少なくとも 1 人以上の指導教授あるいは指導准教授が担当しているなど、適正な配置が行われている。	専攻における人事計画に沿って、「大学等の設置基準」をもとに適切な職位ごとの充足を行っている。また採用・昇格に関しては、東京農業大学教員資格審査マニュアルに則り「5 年以内の責任著者としての 3 報以上を有する」ことの取扱いなど、厳格な運用が行われている。	前学期・後学期に実施される授業アンケートの結果を大学院担当教員に回覧することで共有し、その結果から問題点や課題を抽出し、適切な改善計画の策定を行うなど教育および教員組織の改善を適切に実施している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに取りまとめて、次年度以降の活動の意識付けをしている。また、専攻会議において、教員組織の適切性について、専攻教員配置表等を元に、適宜、検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・「5 年以内の責任著者として最低 3 報」をコンスタントに維持することが難しい点。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・中長期の人事計画のみならず組織改革など突発的な事象にも対応可能な論文作成計画を立案する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの -(資料 7)、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 7)、◆専攻人事計画書（資料 7)、◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆2023F 授業評価アンケート（資料 5)、◆授業評価アンケートに対する改善計画書（資料 6)	◆学科（専攻）教員配置表一年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 7)、◆専攻人事計画書（資料 7)、◆教務職員資格審査基準及び関連書類、◆令和 5 年度活動報告（資料 9)

学部・研究科名 応用生物科学研究科
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農芸化学を総体的に理解する。	研究成果を発信する。	
実行サイクル	____4____年サイクル（2023年～2026年）	____4____年サイクル（2023年～2026年）	
実施 スケジュール	講義科目を中心に研究室毎に外部講師を手配し、各専門領域での先端的な研究に触れ、農芸化学を総体的に理解する。	プレゼンテーション法、農芸化学特別演習、特別研究指導などにおいてプレゼンテーションに関する技術を修得する。	
目標達成を測定する指標	該当科目の成績及び授業評価により判断する。	該当科目の成績及び授業評価、学術論文掲載数、学会発表数により判断する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究成果の発信	研究業績の発信	
実行サイクル	____4____年サイクル（2023年～2026年）	____4____年サイクル（2023年～2026年）	_____年サイクル（平成____年～____年）
実施 スケジュール	教員毎に適宜、学術論文などの投稿、学会での発表を行う。	定期的に自己点検システムの更新を教員へ促す。併せて、学科 HP 内に学科ニュースリリースを設置して、研究に関するトピックスを発信する。	
目標達成を測定する指標	学科 HP で内容を確認する。	学科 HP で内容を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科 HP 内で適切に掲示されていた。	学科 HP 内で適切に掲示されていた。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・
根拠資料名	学科 HP	学科 HP	

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	・なし	・なし	・なし
実行サイクル	_____年サイクル（平成_____年～_____年）	_____年サイクル（平成_____年～_____年）	_____年サイクル（平成_____年～_____年）
実施 スケジュール	・なし	・なし	・なし
目標達成を測 定する指標	・なし	・なし	・なし
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・なし	・なし	・なし
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名			

2023（令和 5）年度 包括的な点検・評価報告書

学部・研究科名 応用生物科学研究科
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、微生物工学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を通じて、各専門分野における確かな知識と技術を修得する。	プレゼンテーション法を通じて口頭発表を行う能力を高める。	博士後期課程への進学者を確保する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）
実施 スケジュール	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、微生物工学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を実施するとともに、最新の知見、技術の導入により内容の充実化を図る。	博士前期課程 2 年の学生を対象に中間発表会(ポスター形式)および最終発表会(口頭発表)を実施する。また、大学院全体で開催されるポスター発表会への参加を促す。	醸造学専攻特別講義を 1 年間に 2 回開催し、研究職の魅力をアピールする。
目標達成を測定する指標	専攻内の研究発表、学会発表、就職状況から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。	ポスターおよびスライドの完成度、プレゼンテーション技術、質疑応答の状況から総合的に判断する。	博士後期課程進学者数から評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・専攻内の中間発表会や最終発表会の内容は十分に高いレベルであり、また就職状況も、醸造関連から化学系の企業まで幅広い企業に就職していることから、特論科目を実施する中で、最新の知見と技術を修得できたと判断した。	・博士前期課程 2 年生について、対面でのポスター発表会（中間発表会）と口頭発表会（最終発表会）を行い、活発な質疑応答がなされた。また両発表会の準備として各研究室でプレゼンテーションを指導した。発表会実施について学部生と大学院生全員を対象に周知し、発表者以外の参加もみられた。	・醸造学専攻特別講義については実施し多くの大学院生が参加した。博士後期課程の進学者は 1 名であり、研究職の魅力は伝わっていると判断される。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科と専攻において最新の分析機器を運用することで、新しい技術の修得にも力を入れている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

2023（令和5）年度 包括的な点検・評価報告書

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科・専攻共通機器の効果的運営	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	___ 4 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 9 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 6 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 6 年）
実施 スケジュール	策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。 機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。策定したルールについては、必要な場合には実状に応じた改訂を行う。	・学会発表は、専攻で年間 20 件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、専攻で年間 6 件を目標とする。 ・できる限り Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	専攻全体として、年間 10 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	共通機器の精米機を複数の研究室で利用している。共通機器である GC/MS, LC/MS を担当研究室の管理のもと運用している。学部共通機器について担当者を決め、運用等についての情報を共有している。次年度には新たに学科共通機器としてメタボローム解析用 LC-MS/MS を導入し各研究室の研究の進展を図る。	・学会発表数は専攻で 33 件と昨年度と同数であった。論文発表数は 16 件であり、昨年度より 5 件増加した。外部資金申請は本年度 28 件で昨年度よりも 3 件増加した。今年度発表論文のうち、 IF の高いものは 4.1 であった。以上の様にいずれも目標も達成した。	・公的機関、企業との共同研究が 69 件あり、十分に達成していると考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・共通機器を特定研究室が管理することで大きな故障等を起こさずに運用できている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】 ・これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる。	【特色】 ・発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できており、各研究室で活発な研究発表と論文発表が行われている。	【特色】 ・醸造関連企業との連携のみならず、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。特定管理者のみの留まらずワーキンググループを積極的に活用していく必要がある。	【問題点】 ・教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・将来的な共通機器購入のための継続した話し合いも必要である。	【課題】 ・英語の学術論文への投稿を増やし、引き続き論文投稿を継続していく。また、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	プレゼンテーション能力を高める		
実行サイクル	1 年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	年サイクル（ 年～ 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 学会での発表を積極的に行う。 2. 大学内におけるポスター発表会でのポスター作製、ポスターを用いた質疑応答を行う。		
目標達成を測定する指標	1. 大学院生の学会での発表数を確認する。 2. ポスター発表会での発表数を確認する。		
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 大学院生の学会発表数は28件であった。 2. 博士前期課程2年生18名および博士後期課程4名の合計20名がポスター発表をした。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学内大学院研究発表会においては、休学中の院生を除き、全員が参加し、所定の発表までを遂行した。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・今年度は、基本的には対面型の学会が多く開催された。大学院生による発表は例年通りのレベルであった。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・根拠資料に示すとおり、大学院の学会発表数を明確化した。概ね学会参加ないし発表を促していることが明らかとなった。さらに、研究室ないし担当指導教員により目標達成にばらつきがあることも明らかとなった。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	食品安全健康学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。	様々な研究助成などからの外部資金の取得を試み、研究活動の推進につなげる。	
実行サイクル	____1____年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	____1____年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	_____年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康分野に関連する国内外の学会で発表する。 2. 食品安全健康分野に関連する和文誌、国際誌に投稿する。	外部資金獲得のために科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに応募する。	
目標達成を測定する指標	1. 学会発表数を確認する。 2. 学術論文掲載数を確認する。	外部資金の申請数を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 学会発表数は33件であった。 2. 掲載論文数は13件であった。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	受験者数の増加を図る。	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品あるいは機能性表示食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本専攻のディプロマポリシーにある「食品安全健康学専攻は、食品の『安全性』と『機能性』の両分野において、問題解決力を身につけた研究者や高度な専門職業人を輩出する」専攻であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。	
実行サイクル	1 年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	1 年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康学科学生に対して、講義等を通じて、研究の意義、研究職の魅力をアピールする。 2. 食品安全健康学科学生に対して、学期最初に行われるガイダンスなどを通じて PR する。	1. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。	
目標達成を測定する指標	1. 食品安全健康学専攻受験者数を確認する。 2. 専攻説明会の回数、参加人数を確認する。	1. 参加学会懇親会数を確認する。 2. 問い合わせを受けた企業数を確認する	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 大学院志望者については、前期博士前期課程で、推薦入試に2名、1期試験に16名、2期試験に4名の受験者があった。博士後期課程で、2期試験に1名の受験者があった。 2. 大学院志望者に対して、前期1期試験前に2回、後期2期試験前に1回の説明会を実施した。	1. 大学院生の学会発表数は28件であった。 2. 博士前期課程2年生18名および博士後期課程4名の合計20名がポスター発表をした。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本祐司

学科名・専攻名 食品栄養学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	カリキュラムポリシーに基づいて体系化されたカリキュラムを通じて各専門分野における最新の知識と技術を習得する。
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和5年～6年）
実施 スケジュール	食品栄養学特論および人間栄養学特論を必修科目とし、博士前期課程1年前学期で食品栄養学の幅広い専門的基礎知識や技術、研究手法を主体的に修得する。食品栄養学特別演習および食品栄養学特別実験をⅠ～Ⅳに細分化して段階的に目標を定めて実施することで、きめ細やかな研究指導を行う。食品生化学、フードシステム管理学、調理科学、栄養生理学、保健栄養学、臨床栄養学の専門分野における特論科目を実施することで最新の知識および技術を習得できるように内容の充実を図る。
目標達成を測定する指標	（1） 専攻内の研究発表および学会発表から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。 （2） 学生による授業アンケート結果により評価する。
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	専攻内からの研究発表は、2023年大学院研究発表会での4演題と各種学術集会での7演題が発表された。また、2023年前学期の授業評価アンケートでは、授業内容を理解するために積極的に取り組みましたか？について「強くそう思う」が54%。「そう思う」が42%と肯定的な意見が多く（9割以上）、出席状況も「90%以上」が100%と良好な出席状況であったことから当該カリキュラムは最新の知識と技術を習得するのに寄与していたため、自己評価としては一部達成できたと考えられた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆令和5年度活動報告書（資料9）、◆2023F_授業評価アンケート集計結果20231024（資料5）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の獲得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和5年～6年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会に参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌に投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測 定する指標	達成度を判断するための指標としては、 (1) 教員の学会発表演題数 (2) 学術論文掲載数 (3) 外部資金への申請数 などを確認し評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各教員の学会発表演題数、学術論文掲載数、外部資金への申請数はおおむね認められたことから、適切な研究活動の推進が確認された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆令和5年度活動報告書（資料9）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	学部からの研究継続による専攻の研究力向上と大学院における入学定員を十分に確保するために内部進学率の向上を目指す。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和5年～6年）
実施 スケジュール	(1) 学内推薦入試を実施する。 (2) 大学院特別講義への学部生の参加を促すことで、研究に対する意識付けに繋げる。 (3) 卒業論文研究への早期着手による大学院進学への意識付けを積極的に行う。
目標達成を測 定する指標	(1) 大学院特別講義への学部生参加者数により評価する。 (2) 内部進学生により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院特別講義への学部生の参加者数は、121名であり、学部生に対する研究および大学院進学に関する意識付けがある程度なされたと考えられた。学内推薦入試では、定員3名に対して2名の応募者があった。専攻内会議において、令和6年度推薦入試の応募要件などを再検討したところ、今年度と同様の条件（GPA2.70以上）で行うことになった。内部進学生は、博士前期課程で推薦入試2名、1期入試3名、2期入試2名の計7名であり、定員数6も充足した。卒業論文の早期着手に関しては、各研究室の状況などによりばらつきがあった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教員ごとの卒論研究の進捗状況だけでなく、実験機器の使用状況なども異なっていたため、卒業論文研究への早期着手はばらつきがみられた。
	【課題】 ・卒業論文研究への早期着手に向けて各研究室は継続して取り組む。
根拠資料名	◆2023年度食品栄養学専攻特別講義一覧（資料1）、◆2024年度東京農業大学大学院入試志願者・合格者数（資料8）

学部・研究科名 応用生物科学研究科
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農芸化学を総体的に理解する。	研究成果を発信する。	
実行サイクル	____4____年サイクル（2023年～2026年）	____4____年サイクル（2023年～2026年）	
実施 スケジュール	講義科目を中心に研究室毎に外部講師を手配し、各専門領域での先端的な研究に触れ、農芸化学を総体的に理解する。	プレゼンテーション法、農芸化学特別演習、特別研究指導などにおいてプレゼンテーションに関する技術を修得する。	
目標達成を測定する指標	該当科目の成績及び授業評価により判断する。	該当科目の成績及び授業評価、学術論文掲載数、学会発表数により判断する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。	該当科目の評価責任者を中心に現状を把握した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究成果の発信	研究業績の発信	
実行サイクル	4 年サイクル（2023 年～2026 年）	4 年サイクル（2023 年～2026 年）	年サイクル（平成 年～ 年）
実施 スケジュール	教員毎に適宜、学術論文などの投稿、学会での発表を行う。	定期的に自己点検システムの更新を教員へ促す。併せて、学科 HP 内に学科ニュースリリースを設置して、研究に関するトピックスを発信する。	
目標達成を測定する指標	学科 HP で内容を確認する。	学科 HP で内容を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科 HP 内で適切に掲示されていた。	学科 HP 内で適切に掲示されていた。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・
根拠資料名	学科 HP	学科 HP	

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	・なし	・なし	・なし
実行サイクル	_____年サイクル（平成 _____年～ _____年）	_____年サイクル（平成 _____年～ _____年）	_____年サイクル（平成 _____年～ _____年）
実施 スケジュール	・なし	・なし	・なし
目標達成を測 定する指標	・なし	・なし	・なし
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・なし	・なし	・なし
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名			

2023（令和 5）年度 包括的な点検・評価報告書

学部・研究科名 応用生物科学研究科
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、微生物工学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を通じて、各専門分野における確かな知識と技術を修得する。	プレゼンテーション法を通じて口頭発表を行う能力を高める。	博士後期課程への進学者を確保する。
実行サイクル	1 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）	1 年サイクル（令和 3 年～令和 4 年）
実施 スケジュール	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、微生物工学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を実施するとともに、最新の知見、技術の導入により内容の充実化を図る。	博士前期課程 2 年の学生を対象に中間発表会(ポスター形式)および最終発表会(口頭発表)を実施する。また、大学院全体で開催されるポスター発表会への参加を促す。	醸造学専攻特別講義を 1 年間に 2 回開催し、研究職の魅力をアピールする。
目標達成を測定する指標	専攻内の研究発表、学会発表、就職状況から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。	ポスターおよびスライドの完成度、プレゼンテーション技術、質疑応答の状況から総合的に判断する。	博士後期課程進学者数から評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・専攻内の中間発表会や最終発表会の内容は十分に高いレベルであり、また就職状況も、醸造関連から化学系の企業まで幅広い企業に就職していることから、特論科目を実施する中で、最新の知見と技術を修得できたと判断した。	・博士前期課程 2 年生について、対面でのポスター発表会（中間発表会）と口頭発表会（最終発表会）を行い、活発な質疑応答がなされた。また両発表会の準備として各研究室でプレゼンテーションを指導した。発表会実施について学部生と大学院生全員を対象に周知し、発表者以外の参加もみられた。	・醸造学専攻特別講義については実施し多くの大学院生が参加した。博士後期課程の進学者は 1 名であり、研究職の魅力は伝わっていると判断される。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科と専攻において最新の分析機器を運用することで、新しい技術の修得にも力を入れている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

2023（令和5）年度 包括的な点検・評価報告書

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科・専攻共通機器の効果的運営	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	___ 4 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 9 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 6 年）	___ 1 ___ 年サイクル（令和 5 年～令和 6 年）
実施 スケジュール	策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。 機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。策定したルールについては、必要な場合には実状に応じた改訂を行う。	・学会発表は、専攻で年間 20 件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、専攻で年間 6 件を目標とする。 ・できる限り Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	専攻全体として、年間 10 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	共通機器の精米機を複数の研究室で利用している。共通機器である GC/MS, LC/MS を担当研究室の管理のもと運用している。学部共通機器について担当者を決め、運用等についての情報を共有している。次年度には新たに学科共通機器としてメタボローム解析用 LC-MS/MS を導入し各研究室の研究の進展を図る。	・学会発表数は専攻で 33 件と昨年度と同数であった。論文発表数は 16 件であり、昨年度より 5 件増加した。外部資金申請は本年度 28 件で昨年度よりも 3 件増加した。今年度発表論文のうち、 IF の高いものは 4.1 であった。以上の様にいずれも目標も達成した。	・公的機関、企業との共同研究が 69 件あり、十分に達成していると考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・共通機器を特定研究室が管理することで大きな故障等を起こさずに運用できている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】 ・これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる。	【特色】 ・発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できており、各研究室で活発な研究発表と論文発表が行われている。	【特色】 ・醸造関連企業との連携のみならず、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。特定管理者のみの留まらずワーキンググループを積極的に活用していく必要がある。	【問題点】 ・教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・将来的な共通機器購入のための継続した話し合いも必要である。	【課題】 ・英語の学術論文への投稿を増やし、引き続き論文投稿を継続していく。また、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 食品安全健康学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	プレゼンテーション能力を高める		
実行サイクル	1 年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	年サイクル（ 年～ 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 学会での発表を積極的に行う。 2. 大学内におけるポスター発表会でのポスター作製、ポスターを用いた質疑応答を行う。		
目標達成を測定する指標	1. 大学院生の学会での発表数を確認する。 2. ポスター発表会での発表数を確認する。		
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 大学院生の学会発表数は28件であった。 2. 博士前期課程2年生18名および博士後期課程4名の合計20名がポスター発表をした。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学内大学院研究発表会においては、休学中の院生を除き、全員が参加し、所定の発表までを遂行した。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・今年度は、基本的には対面型の学会が多く開催された。大学院生による発表は例年通りのレベルであった。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・根拠資料に示すとおり、大学院の学会発表数を明確化した。概ね学会参加ないし発表を促していることが明らかとなった。さらに、研究室ないし担当指導教員により目標達成にばらつきがあることも明らかとなった。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	食品安全健康学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により、国内外の社会に発信する。	様々な研究助成などからの外部資金の取得を試み、研究活動の推進につなげる。	
実行サイクル	____1____年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	____1____年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	_____年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康分野に関連する国内外の学会で発表する。 2. 食品安全健康分野に関連する和文誌、国際誌に投稿する。	外部資金獲得のために科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに応募する。	
目標達成を測定する指標	1. 学会発表数を確認する。 2. 学術論文掲載数を確認する。	外部資金の申請数を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 学会発表数は33件であった。 2. 掲載論文数は13件であった。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	受験者数の増加を図る。	今後の食品企業では、安全・安心という「守り」と、機能性食品などの新たな市場への「攻め」のそれぞれに対応できる、攻守のバランスのとれた人材が求められているといえる。また行政にとっても、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、ますます多様化する機能性食品あるいは機能性表示食品市場を規制する取り組みが必要で、やはり同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本専攻のディプロマポリシーにある「食品安全健康学専攻は、食品の『安全性』と『機能性』の両分野において、問題解決力を身につけた研究者や高度な専門職業人を輩出する」専攻であることを広く食品企業等関連業界に周知させる。	
実行サイクル	1 年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	1 年サイクル（令和 4 年～ 5 年）	年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 食品安全健康学科学生に対して、講義等を通じて、研究の意義、研究職の魅力をアピールする。 2. 食品安全健康学科学生に対して、学期最初に行われるガイダンスなどを通じて PR する。	1. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科 PR を行う。	
目標達成を測定する指標	1. 食品安全健康学専攻受験者数を確認する。 2. 専攻説明会の回数、参加人数を確認する。	1. 参加学会懇親会数を確認する。 2. 問い合わせを受けた企業数を確認する	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	1. 大学院志望者については、前期博士前期課程で、推薦入試に2名、1期試験に16名、2期試験に4名の受験者があった。博士後期課程で、2期試験に1名の受験者があった。 2. 大学院志望者に対して、前期1期試験前に2回、後期2期試験前に1回の説明会を実施した。	1. 大学院生の学会発表数は28件であった。 2. 博士前期課程2年生18名および博士後期課程4名の合計20名がポスター発表をした。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本祐司

学科名・専攻名 食品栄養学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	カリキュラムポリシーに基づいて体系化されたカリキュラムを通じて各専門分野における最新の知識と技術を習得する。
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和5年～6年）
実施 スケジュール	食品栄養学特論および人間栄養学特論を必修科目とし、博士前期課程1年前学期で食品栄養学の幅広い専門的基礎知識や技術、研究手法を主体的に修得する。食品栄養学特別演習および食品栄養学特別実験をⅠ～Ⅳに細分化して段階的に目標を定めて実施することで、きめ細やかな研究指導を行う。食品生化学、フードシステム管理学、調理科学、栄養生理学、保健栄養学、臨床栄養学の専門分野における特論科目を実施することで最新の知識および技術を習得できるように内容の充実を図る。
目標達成を測定する指標	（1） 専攻内の研究発表および学会発表から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。 （2） 学生による授業アンケート結果により評価する。
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	専攻内からの研究発表は、2023年大学院研究発表会での4演題と各種学術集会での7演題が発表された。また、2023年前学期の授業評価アンケートでは、授業内容を理解するために積極的に取り組みましたか？について「強くそう思う」が54%。「そう思う」が42%と肯定的な意見が多く（9割以上）、出席状況も「90%以上」が100%と良好な出席状況であったことから当該カリキュラムは最新の知識と技術を習得するのに寄与していたため、自己評価としては一部達成できたと考えられた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆令和5年度活動報告書（資料9）、◆2023F_授業評価アンケート集計結果20231024（資料5）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の獲得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和5年～6年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会に参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌に投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測 定する指標	達成度を判断するための指標としては、 (1) 教員の学会発表演題数 (2) 学術論文掲載数 (3) 外部資金への申請数 などを確認し評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	各教員の学会発表演題数、学術論文掲載数、外部資金への申請数はおおむね認められたことから、適切な研究活動の推進が確認された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆令和5年度活動報告書（資料9）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	学部からの研究継続による専攻の研究力向上と大学院における入学定員を十分に確保するために内部進学率の向上を目指す。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和5年～6年）
実施 スケジュール	(1) 学内推薦入試を実施する。 (2) 大学院特別講義への学部生の参加を促すことで、研究に対する意識付けに繋げる。 (3) 卒業論文研究への早期着手による大学院進学への意識付けを積極的に行う。
目標達成を測 定する指標	(1) 大学院特別講義への学部生参加者数により評価する。 (2) 内部進学生により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院特別講義への学部生の参加者数は、121名であり、学部生に対する研究および大学院進学に関する意識付けがある程度なされたと考えられた。学内推薦入試では、定員3名に対して2名の応募者があった。専攻内会議において、令和6年度推薦入試の応募要件などを再検討したところ、今年度と同様の条件（GPA2.70以上）で行うことになった。内部進学生は、博士前期課程で推薦入試2名、1期入試3名、2期入試2名の計7名であり、定員数6も充足した。卒業論文の早期着手に関しては、各研究室の状況などによりばらつきがあった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教員ごとの卒論研究の進捗状況だけでなく、実験機器の使用状況なども異なっていたため、卒業論文研究への早期着手はばらつきがみられた。
	【課題】 ・卒業論文研究への早期着手に向けて各研究室は継続して取り組む。
根拠資料名	◆2023年度食品栄養学専攻特別講義一覧（資料1）、◆2024年度東京農業大学大学院入試志願者・合格者数（資料8）